

総合カリキュラムと家庭科教育

愛知教育大学家政学教室 米川五郎

はじめに

家庭科教育の立場を明らかにするために、家庭科教育の歴史のアウトラインについて述べ、次いで教科としての家庭科教育の特性についてふれることにした。総合カリキュラムについては家庭科教育の立場からというよりは家庭科教育を core にした実践例を少し紹介することにした。

1. 家庭科教育の歴史

ごく簡単に家庭科教育の経緯をふり返ってみると、大別して戦前の歴史と、戦後に分けることができる。

1) 戦前の歴史⁽¹⁾

初等科に限定すると、明治初年くらい裁縫教育や家事教育が、女子教育として行なわれてきた。これは、今日の家庭科教育の前身といえよう。

2) 戦後の歴史⁽²⁾

いわゆる家庭科教育が制定されたのは、第二次大戦後のことであり、6・3制の発足と同時であった。まず、小学校家庭科を取上げよう。昭和22年(1947)成立くらい今日まで、第5～第6学年の男女必修の教科となっている。戦前と大きくことなるのは、この男女共修であり、男女必修という点であり、教科内容ということになろう(表1)。

一方中学校の家庭科はどうであろうか。表1にみるように、はじめ職業科に属していたものが、職業・家庭となり、さらに昭和33年改訂により現行の技術・家庭となっている。技術は男子向き、家庭は女子向きとなっていたが、今回(昭和52年)の改訂により履修の一部について男子、女子相互乗り入れが行なわれることになった。

家庭科教育のあり方は、小学校では男女必修、中学校で女子向きについて女子必修、なお高校でも女子必修のような形態となっており、家庭科教育の立場から小学校から高校まで一貫した男女共修が強く要望されている。

表1 小・中学校における家庭科教育課程の変遷(昭和22年～52年改訂)

年 度	小 学 校			中 学 校				備 考
	必 修		備 考	必 修		選 択		
	学 科 目	各 学 年 毎 週 授 業 時 数		学 科 目	各 学 年 毎 週 授 業 時 数	学 科 目	各 学 年 毎 週 授 業 時 数	
昭和22年	家 庭	3	第5・6 学年男女 共通学習	職 業 (農, 工,商, 水,家)	4	職 業	1～4	必修で職業科のうち1科目または教科目履習し,なお必要に応じて選択履習ができる。
昭和26年改訂	家 庭	2～2.5	家庭生活 指導	職 業・ 家 庭	3～4	職 業・ 家 庭	3～4	農,工,商,水,家のわくを はずし「実生活に役立つ仕事」 を中心とした学習に再編成さ れた。仕事を4類12項目に分 類した。
昭和31年改訂	家 庭	2～2.5	家 族 関 係,家庭 管理,被 服,食物 住居					
昭和32年改訂				職 業・ 家 庭	3～4	職 業・ 家 庭	3～4	内容を第1群から第6群まで の6領域とする。第4群(水 産)をのぞく他の5つの分野 は各群1単位ずつを男女共通 学習とした。男子も第5群 (家庭内容)を学習した。
昭和33年改訂	家 庭	2	被服,食 物,すま い,家庭	技 術・ 家 庭	3	家 庭	2	必修の技術・家庭コースは男 女別コース 女子向き…調理,被服製作 保育設計・製図 家庭機 械 男子向き…設計・製図 木 材加工 金属加工 機械 電気 総合実習
昭和43年改訂	家 庭	2	被服,食 物,すま い,家族	技 術・ 家 庭	3	家 庭	第1 学年 1 第2 学年 2 第3 学年 2	女子向き…食物 被服 住居 保育 家庭機械 家庭電気 男子向き…製図 木材加工 金属加工 機械 電気 栽培
昭和52年改訂	家 庭	2	被服,食 物,住居 と家族	技 術・ 家 庭	第1 学年 2 第2 学年 2 第3 学年 3	技 術・ 家 庭	第3 学年 1	A. 木材加工 B. 金属加工 C. 機械 D. 電気 E. 裁 培 F. 被服 G. 食物 H. 住居 I. 保育 履習方法(本書p.41参照)

2. 家庭科の特性

(大道寺純子氏)(3)

今回の新学習指導要領によると,小学校家庭科および中学校技術・家庭科の目標は次のようである。

(1) 小学校家庭科の目標

日常生活に必要な衣食住などに関する実践的な活動を通して,基礎的な知識と技能を習得させるとともに家庭生活についての理解を深め,家族の一員として家庭生活をよりよくしようとする実践的な態度を育てる。

(2) 中学校技術・家庭科の目標

生活に必要な技術を習得させ,それを通して家庭や社会における生活と技術との関係を理解させるとともに,工夫し創造する能力及び実践的な態度を育てる。

以上の目標から明らかなように、家庭科の特性としては① 実践的性格、② 総合的性格の二つがあげられる。⁽³⁾ 実践的性格はまさしく、Learning By Doing といえるものであり、理論と実践の相互反復により、いずれもが高度化することが望まれる。同時に、知育偏重とか、机上学習の多い現代の教育にあつて、こうした実践的性格は重要性をもつものといえよう。総合的性格もまた家庭科教育の独自性ともいえるものであろう。家庭科が教育内容とするものは家庭生活における食物、被服、家庭管理と住居、保育などであり、それぞれは家庭生活の中に統合されている各領域である。家庭科の学習は各領域を各論として学習するに止まらず、家庭生活を全体的に把握しなければならないのである。このために、実習による実践的な学習は有効なものとなっている。図1にみるように、生活の構造の多元性は家庭科の教育内容の上に多様な要素をもたらすことになるのである。

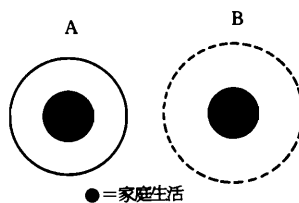
図1.生活の構造⁽⁴⁾



生活は本来すべてのものを包含する実在であるが、便宜上分けるならば、内包するもの(家庭——自然的要素)と外延(社会——社会的要素)が関連している。

(藤枝恵子氏)

図2.家庭生活にかかわる人間のあり方⁽⁵⁾



Aは家庭生活を中心とする生活、Bは(家庭生活を中心とする)人間の生活(破線でひろがりを示す)を示し、中心とするものはほぼ同じでも重みのかけかたの違いを示そうとしたもの。

(藤枝恵子氏)

なお、細谷俊夫氏は家庭科は社会科、保健科などとともに、生活教科あるいは課題教科とよび、具体的な生活領域が教育の目標となる教科としている。⁽⁶⁾ また、蛸谷米司氏は、家庭科は体育とともに人間そのものに即した性格をもつことを指摘している。⁽⁷⁾

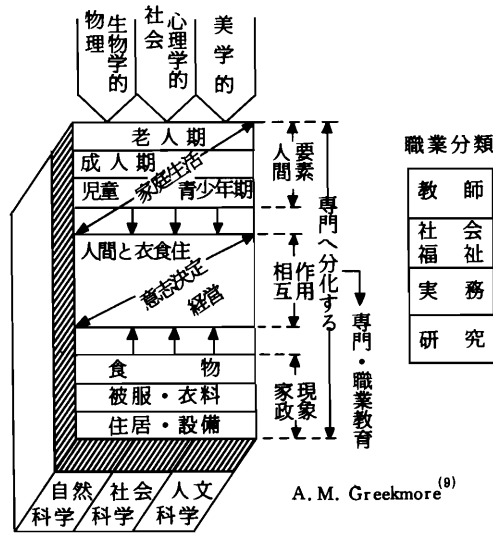
図2にみるように、家庭科教育の教育の対象として、あくまでも家庭生活を中心とする生活として把えるものと、人間の生活として範囲をひろげるものと、二つの考えがあげられる。前者は従来の家庭科、後者は生活科といったものに、それぞれ該当するといえよう。⁽⁸⁾

家庭科教育の基盤の一つとして家政学があげられるが、ここではCreekmoreの家政学の体系図式をあげるに止めたい。⁽⁹⁾

家庭科教育の現代の課題としては、

- (1) 小学校・中学校・高校を通しての教科としての一貫性の確立
 - (2) 教育内容を児童・生徒の発達段階に対応して精選し、体系化すること
 - (3) 男女共修の実現化
- などがあげられよう。

図3 家政学の体系図式



3. 総合カリキュラムと家庭科教育

筆者の属する総合カリキュラム開発研究会では現在なお、研究が進行中であり、まだ総合カリキュラムのあり方は明確化されていない。

筆者の考えの一端といったものを述べることにしたい。

それぞれの教科はそのまま存続し、一つの総合学習の時間を設ける。そのさい、いろいろな学習形態がありうるが、範囲をある程度にせばめたcompact modelの採用などは有効なものではないか。そうしたモデルの一つとして、家庭生活などが取上げられないだろうか。このような意味で、一、二の実践例あるいは考え方を示したい。

近年、消費者教育が学校教育の中でも積極的に取り上げられるようになってきたが、これは家庭科教育の中で取り上げられることは当然としても、総合学習として取り上げ各教科の立場から参加すれば非常に優れた学習ができるのではなかろうか。ここでは、家庭科教育における一つの試案をあげることにする。⁽¹⁰⁾

表2 小学校における消費者教育の試案⁽¹⁰⁾

小学校低学年消費者教育題材例				
	I. 家庭生活の価値形成	II. 個人・家族と消費	III. 生活財と家庭生活	IV. 消費生活活動の実践
家保	・私たちは生きている	・私と家族の紹介	・私にできること	・できる仕事の計画と実行
衣	・からだの健康と衣服	・衣服のなまえ	・布、皮、ゴム、プラスチックあて	・着がえとあとしまつ(1)
食	・私たちに必要なたべもの	・食品の買いもの	・いろいろな食物と分け方(三色分類)	・給食のたべ方
住	・もし家がなかったら	・家の中のただものさがし	・家の中の生活	・私たちの家のかたち(一戸建、アパート、団地、マンション)
家経	・私たちと家庭	・家族の仕事	・お金で買えるものと買えないもの	・じょうずなおつかい ・遊びの計画と実行

小学校中学年消費者教育題材例				
	I. 家庭生活の価値形成	II. 個人・家族と消費	III. 生活財と家庭生活	IV. 消費生活活動の実践
家・保	・私の誕生と成長の記録	・私たちは消費者	・はたらきと賃金 ・私の生活リズム表	・私にできる家族への奉仕活動
衣	・よい子の身なり	・衣服の種類 ・小さくなった衣服のゆくえ	・運動着の役目と使われている材料 (天然繊維と化学繊維の名まえ)	・着がえとあとしまつ(2) ・毛糸を使ったピース作り(織物)
食	・たべものじょうぶなからだ	・私のすきなもの、きらいなもの	・人々の活動とたべもの ・たべものの衛生	・給食のマナーと会食 ・パンケーキ作り(実習) ・生ジュース作り(実習)
住	・住居の種類(専用住宅と併用住宅) ・家の中の生活	・便利な通学、通勤圏の作成	・生活と道具類	・こんな家がほしい(平面図を書く)
家経	・家族のいとなみ	・私の家庭生活時間の計画(作成)	・私のもちもの	・学用品の買いもの ・商品についての表示やマーク

注：藤枝恵子・内藤道子両氏による。なお、小学校高学年案は紙面の都合上省略した。

(11), (12)

また、岐阜市立長良小学校における「生活コース」の実践例がある。これは昭和40年代から始められ、10年以上つづけられたもので、次のような発想の下に設けられている。

——長良の子どもの実態を見た時、自分づくりの点から、よりよく生活できる技能を身につけることが必要と考えたこと、それに関連して、家庭科教育を一年から六年まで、一貫した指導をねがっていたことから、学校教育全体の中で特別教育活動の中に、「生活コース」を位置づけたのである。——

1. 自分のからだや身のまわりのことを考え、よくしていくことができる子ども
2. くらしを楽しく、くふうできる子ども
3. 自分のもの、みんなのものを大切にできる子ども
4. 相手の気持ちが考えられ、行動できる子ども
5. 自分たちのきまりが守れる子ども

以上が具体的な目標とされ、1年～4年までに、「生活コース」三十五時間を設けている。たとえば、第1学年の例は次のようである。

便所の使い方(1), 学校のいきかえり(1), 学校のチャイム(1), 給食の待ち方(1), かきのしまつ(1), あいさつ(1), おかあさんありがとう(1), そうじ(1), むしばとおやつ(1), 教室のあそび(1), 手足をきれいにしよう(1), 水着のあとしまつ(1)。

これは夏休み前までのものである。

おわりに

家庭科教育については、同じ教科内では研究会や話し合いが比較的多く行なわれているが、多数の教科を論じたり研究したりするような会合で家庭科教育の問題を取上げる機会は非常に少ないように思われる。このような機会に、家庭科に対するきびしいご批判や、

ご意見が頂ければ、家庭科教育の前進にとって此の上ないことと思われる。なお、本稿は愛知教育大学総合カリキュラム開発研究会の月例研究会で発表したものをまとめたものである。また、家庭科教育に関する考え方も筆者個人のものであり、独断や偏見があればすべて筆者の責任によるものである。

文 献

- (1) 教員養成大学・学部教官研究集会 家庭科教育部会、「家庭科教育の研究」学芸図書(1978), pp.46—56. なお、(3)も参照した。
- (2) (1)と同じ
- (3) 大道寺純子「小学校家庭科の歩み」：赤井・大道寺・中野・浜田「初等教育 家庭科教育の研究」建帛社(1978)所収。
- (4) 藤枝恵子「家庭科教育に関する論争」：斉藤健次郎，藤枝恵子編着「教育学講座15 家庭生活と技術の教育」学習研究所(1979) pp. 38—51.
- (5) (4)と同じ。
- (6) 「教育学大事典」第一法規(1978)：細谷俊夫氏執筆「学校」の項目による。
- (7) 蛭谷米司「児童・生徒の発達と教科教育」日本家庭科教育学会誌 第23巻，第1号(1980)。
- (8) (4)と同じ。
- (9) A.M.Creekmore, Journal of Home Economics, VoL. 60, No.2.(1968) p. 97.(平田昌，松崎ナツ「議義・家政学原論」中教出版(1976)によった。)
- (10) 藤枝，村尾，堀田，内藤，米川「家庭科教育における消費者教育の実際」家政教育社(1979) pp. 44—45。
- (11) 新井規子「生活コースの誕生」：岐阜市立長良小学校「新教育構想十年の歩み」(1978)所収。
- (12) 岐阜市立長良小学校「昭和52年度～昭和54年度 生活コース家庭科カリキュラム」
なお，愛知県教育センター「小学校低学年における合科的な指導の研究と実践」(1980)も参照した。